

駒澤書翰



第22号

発行日：
2024年12月15日
発行所：
株式会社エヌワイケー
〒154-0012
世田谷区駒沢5-7-6
電話：
03-3704-8391
FAX：
03-3703-7121
発行人：
横山和俊

所長のひと言 ―甲子園 すべてじゃない―

師走の候、皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます、所長の横山です。

さて、日経新聞の専門紙、日経MJ名物企画「2024年ヒット商品番付」が今年も発表されました。東の横綱には文句なしで「大谷50-50」が選ばれました。大谷翔平選手は最終的に54本塁打、59盗塁を記録し、2年連続3度目の最優秀選手(MVP)に選出されました。新天地移籍も決して順風満帆なスタートでは無かったにもかかわらず大活躍の一年でした。私のような野球ファンならずとも大谷選手の活躍に熱狂したわけですが、今号はその野球に関する話題を紹介します。

大谷選手が活躍するのはメジャーリーグ(MLB)ですが、高校球児にとつての聖地はなんといっても甲子園です。今年も行われた夏の甲子園全国高校野球選手権のその裏で「リーグ・サマーキャンプ」という異色の野球大会が開催されていました。場所は北海道栗山町の町営球場。夏の甲子園出場を果たせず引退した選手や、日本高校野球連盟高野連に登録していない選手など全国から52名が参加し、4チームに分かれ、各6試合とブレイオフが行われた大会です。この大会の仕掛け人の阪長友仁(さかながともひとさん)(43)は、異色の経歴を持つ高校野球界のイノベーター(革新者)です。阪長さんは、「甲子園を否定するつもりはない。違つ道があつてもいいと思う」と語ります。大会の趣旨、阪長さんの経歴等11月17日付毎日新聞コラムより、「甲子園 全てじゃない」を紹介します。

現在のトーナメント制では、公式戦に敗ればそれで大会から退くため、試合数は限定的だ。春、夏、秋の地方大会全てで初戦敗退した場合、3年間の公式戦は10試合に満たない場合もある。強豪校なら勝ち進んで試合数は増えるが、多数の部員を抱える高校もある。公式戦でベンチ入りできるのは20人。さらに固定されがちなスターティングメンバーは9人。スタンドでの応援で3年間を終える選手もいる。しかし阪長さんは、最も選手が成長するのは試合に出て負ける、または失敗を経験した時だと考えている。リーグ戦総当たり戦ならば一度負けても試合は続く。負けて得た学びを次戦に生かすことができる。「リーグ・サマーキャンプ」は、野球の商業利用を禁じる日本学生野球憲章との兼ね合いから、企業・団体からの協賛金を受け付けることができず、交通費を除いても参加費は27万円と高額だ。しかし、「出場機会がないまま終われない」と続々と選手が集まつてきた。リーグ戦がゆえに初戦での問題点を見事解決し2試合目で結果を出した選手は数多くいた。「スポーツは勝利を目指すものですが、ともに試合を作る仲間でもある相手チームをリスペクトし、野球を通じて成長することに意味があります」と語る阪長さんの原点は、海の向こうで出会った「野球」にあった。

阪長さんは大阪府交野市出身。小学1年より野球を始め、高校は地元を離れ新潟明訓に進んだ。3年の時、第81回全国高校野球選手権(夏の甲子園)で1番・中堅主として本塁打を放つなど活躍。卒業後は立教大学に進学し主将も努めた。いわゆる野球エリートだ。プレイヤーとしては一区切りつけ大手旅行会社JTBに就職。しかし、「自分は野球に育てられたけど、海外ではマイナー競技。普及活動が野球界への貢献になるのでは」と考え始める。その頃、国際協力機構(JICA)が、ニカラグアでの野球普及に取り組む青年海外協力隊を公募していると知る。しかし、2度の受験も不合格。それでもあきらめなかった。スリランカの野球振興を手掛けていた協力隊員と知り合い、2年務めたJTBを退職し助手としてスリランカへ。スリランカでは2年後に控える北京五輪に向けた代表チームの強化に携わる。その後はタイ、ガーナと各地で指導。しかし、カリブ海のドミニカ共和国を訪れ大きな転機を迎える。ドミニカには米大リーグ球団傘下のアカデミー(選手養成機関)が多数存在し、日本の高校生にあたる10代の選手がメジャーリーガーを目指し練習に

励んでいた。コーチは目先の結果でなく20代での開花を目指して指導する。コーチと選手の立場は対等で、選手の考えを尊重しながら必要に応じてプレーを修正。初歩的な失策をしてもコーチは叱責しないなど日本との違いに衝撃を受ける。日本では指導者の多くが絶対的な存在。高圧的で時にはハラスメントが起き選手もおびえながらプレーをしている。ドミニカで見たのは純粹に野球を楽しむ姿だった。14年に帰国。すぐに導入できることとして注目したのがリーグ戦だった。トーナメントと違い、何度も試合をすることが前提のため、挑戦、失敗、成功と成長のサイクルが作りやすい。高校野球にこそ必要だと確信していた。そして15年から高校野球のリーグ戦「リーガ・アグレシーバ」を開催する。当初は大阪府6校で始まったが口コミで徐々に広がり、24年は34都道府県の約180校が参加するまでになった。阪長さんがこの取り組みを広げてきた背景には野球界全体の振興もある。高野連のまとめによると、全国の野球部員数は14年度の約17万人から減少の一途をたどり、24年度には13万人を切った。これには少子化や他競技の広まりのほか、厳しい上下関係や競技環境が影響しているとの指摘もある。これは指導者の個々の人間性だけでなく勝利至上主義も影響していると考えている。「アグレシーバ」の取り組みは、選手だけではなく指導者の育成にも主眼を置く。「立場や年齢が違ってもそれぞれ一生懸命やっている。勝敗も大事だが、野球を通じて、選手も指導者も成長しあえることに価値がある。甲子園より大切なものがある。僕もまだまだ挑戦していきたい。」大会後のインタビューで阪長さんはそう話した。

2018年の日大アメフト部危険タックル問題以降行き過ぎた勝利至上主義は多くのスポーツで問題視されてきました。阪長さんのような取り組みは他のスポーツでも聞くようになっていきます。私の子ども達もスポーツに汗を流す日々です。父親としてスポーツを通じて成長して欲しいと願っています。

編集後記

前は静岡県静岡市のソウルフードをオートバイで食しに行きましたが、今回は電車で神奈川県へ。なぜ電車かと申しますと、駅にまつわる場所を訪れたためです。とあるインスタグラムで見つけた昔懐かしいホームにお店を構えるお蕎麦屋さん。駅のホームとなれば電車が便利です。そんな理由で今回は電車に乗って出かけてきました。

昼時の混雑を避け、早めの昼食を目指して販売所を出発しました。自由が丘駅から東急東横線の菊名でJR横浜線に乗り換え目的の地、東神奈川駅を目指します。さてホームに降り立つと出汁の良い香りが満ち満ちています。これにはびっくり。出汁の香りに吸い寄せられるように反対側のホームに向かいます。今回の目的地、大正7年創業「日栄軒」に到着です。11時前にもかかわらず5人しか入れない店内は満員。外の券売機にも2人ほど並んでいます。しかし、流石立ち食い蕎麦。あつという間に私の番になり迷わずおすすめの「穴子天そば」を注文します。お客さんもサラリーマン風の男性から主婦とおぼしき女性まで老若男女幅広く、多くの人に愛されているのを感じます。さていよいよ実食です。秀逸なのは出汁でした。天ぷらはつゆより塩派な私。最初は穴子がつゆだくにならないよう気を付けていましたが、いかんせんお椀からはみ出る大きさです。すぐに浸ってしまします。「しまった」と思いながらも食べ続けていくと、甘めのつゆと穴子天が見事なマッチングを見せてくれます。それに気が付いてからは、むしろひたひたとつゆと絡めて穴子天を食しました。ちなみに穴子天そばは650円。このクオリティなら大満足です。また、電車の旅は読書も進むんですね。今回もまた行きたい、と思えるグルメ旅でした。



※21号にて誤植がありました。表面後ろから3行目の「期間困難区域」は「帰還困難区域」の間違いです。訂正してお詫び申し上げます。